

林 武 (はやし たけし / 1896-1975)

東京に生まれる。1921、22年と二科会で犇牛賞、二科賞を受賞。1926年「一九三〇年協会」に加入、1930年独立美術協会の創立に参加、1934年から35年までにフランスに留学。1951年から63年まで東京藝術大学教授をつとめ、1967年文化勲章受章。

藤島武二 (ふじしま たけじ / 1867-1943)

鹿児島に生まれる。はじめ日本画を学ぶがその後洋画に転じ、山本芳翠らに師事、明治美術会に出品。1893年から三重県立尋常中学校校助教諭として3年間を津で過ごす。1896年東京美術学校西洋画科新設に伴い、黒田清輝の推挙により助教授となるとともに白馬会会員となる。また雑誌『明星』の表紙・挿絵もてがける。1905年から10年までフランス・イタリアに留学。帰国後教授に昇格。1937年に第1回文化勲章を受章。

正宗得三郎 (まさむね とくさぶろう / 1883-1962)

岡山県生まれ。1902年上京し寺崎広業の画塾で日本画を学ぶも、同年東京美術学校西洋画選科に入学。白馬会展や文展に出品、文展には1909年第3回展に初入選。1914年渡仏、滞仏中の15年に二科会会員となる。1916年に帰国、1921年から23年に再渡欧。戦後1947年第二紀会を結成、同会の長老として重きをなした。

向井潤吉 (むかい じゅんきち / 1901-1995)

京都市に生まれる。1914年京都市美術工芸学校予科に入学するも、中退し関西美術院に入る。1920年上京し、川端画学校へ通い、同年第7回二科展に初入選後、京都に戻り関西美術院幹事となる。1927年に渡仏。欧州巡遊し1930年に帰国。同年の第17回二科展に滞欧作11点を出品し、犇牛賞を受賞。1936年二科会会員。戦後は行動美術協会を結成、以降同展に出品。

森芳雄 (もり よしお / 1908-1997)

東京に生まれる。1926年慶應義塾大学を修了。「一九三〇年協会」洋画研究所で学び、同協会展及び二科会展に入選。1931年渡欧、パリで画技を磨く。サロン・ドートンヌに入選。1934年帰国。独立美術協会に出品を続け、独立美術協会賞を受賞。1939年独立美術協会会友を退き、自美術家協会の創立に参加。1947年第1回アンデパンダン展に出品。翌年サンパウロ・ビエンナーレ展に出品。1964年自由美術家協会を脱退し、主体美術協会の結成に参加。

山本正道 (やまもと まさみち / 1941- )

京都に生まれる。1961年東京藝術大学彫刻科に入学。1965年東京藝術大学大学院に進学、菊地一雄教室に学ぶ。1967年第31回新作協会展に『無題』等を出品、新作家賞受賞。1968年イタリア政府給費留学生として渡伊、ローマ美術学校のファツィーニ教室に学ぶ。1971年帰国。1976年第5回平塚田中賞受賞。1978年フルブライト芸術部門交換研究員として渡米。同年第9回中原悌二郎賞優秀賞。1995年東京芸術大学教授となる。2000年第31回中原悌二郎賞受賞。

吉本作次 (よしもと さくじ / 1959- )

岐阜県岐阜市に生まれる。1984年名古屋芸術大学美術学部絵画科卒業。1986年「第6回ハラ・アニュアル」(原美術館)出品。1987年「絵画1977-1987」(国立国際美術館)展出品。1996年「子どもの情景—かわいbutとらえがたき」展(三重県立美術館)出品。1997年名古屋芸術奨励賞受賞。「眼差しのゆくえ—現代美術のポジション1997」展(名古屋美術館)出品。2005年「吉本作次」展開催(三重県立美術館)。

モーリス・コルネリス・エッシャー (Maurice Cornelis Escher / 1898-1972)

オランダの版画家。ハーレルムの建築・装飾学校で建築、版画を学ぶ。1924-26年平面充填のデザインに着手。1937年から平面の正則分割をテーマに制作。位相幾何学的な原理に基づき、細密で奇妙な幻想世界をリアルに表現。その版画は1960年代後半から高く評価されるようになった。1960年にケンブリッジの結晶学国際連盟の会議に出席。

マルク・シャガール (Marc Chagall / 1887-1985)

ロシアのヴィテブスクにユダヤ人として生まれる。1910年にパリに出て詩人アポリネールらと知り合う。1914年帰国し、ロシア革命後も祖国で暮らす。1923年以降再度パリで制作。戦時中は迫害を避け、アメリカに亡命、1947年にパリに帰る。1949年より南仏ヴァンスに居を構える。恋人たちや動物、花束などのモチーフが特徴。ロシア的な幻想とユダヤ人特有の神秘的性格とを含む独自の画境を開いた。

ジョアン・ミロ (Joan Miro / 1893-1983)

スペインのバルセロナに生まれる。1918年にバルセロナで最初の個展を開く。1919年にパリを訪れ、1924年頃からダダなどの前衛芸術の洗礼を受け、シュールレアリスム運動に参加し、ユーモア溢れる作風へと変化。1935-40年頃の内乱や戦争の時期には画面が暗くなる。1956年以降も精力的に活動。油彩、水彩、版画のほか、彫刻、陶器、オブジェと幅広く制作。